

8/19 Tue.

第685回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.685 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Guest Conductor
メゾ・ソプラノ
Mezzo Soprano
テノール
Tenor
特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

ワーグナー
WAGNER

[休憩]
[Intermission]

マーラー
MAHLER

ユライ・ヴァルチュハ(首席客演指揮者) -p.6
JURAJ VALČUHA

サーシャ・クック* -p.8
SASHA COOKE

クレイ・ヒリー* -p.8
CLAY HILLEY

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

楽劇《トリスタンとイゾルデ》から
前奏曲と愛の死 [約17分] -p.11
“Tristan und Isolde” Prelude and Liebestod

大地の歌* [約63分] -p.12
Das Lied von der Erde
I. 現世の愁いをうたう酒歌(李白による) テノール独唱
II. 秋に寂しき人(銭起による) アルト独唱
III. 青春について(李白による) テノール独唱
IV. 美しさについて(李白による) アルト独唱
V. 春に酔う人(李白による) テノール独唱
VI. 告別(孟浩然、および王維による) アルト独唱

※当初の発表から、出演者が一部変更になりました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協賛：大成建設株式会社

※本公演では日本テレビの収録が行われます。

8/23 Sat.

第280回 土曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.280 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

8/24 Sun.

第280回 日曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.280 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮
Principal Guest Conductor
第1コンサートマスター
First Concertmaster

R. シュトラウス
R. STRAUSS

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

ユライ・ヴァルチュハ(首席客演指揮者) -p.6
JURAJ VALČUHA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

メタモルフォーゼン [約26分] -p.20
Metamorphosen

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55《英雄》 [約47分] -p.21
Symphony No. 3 in E flat major, op. 55 “Eroica”
I. Allegro con brio
II. Marcia funebre: Adagio assai
III. Scherzo: Allegro vivace
IV. Finale: Allegro molto

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

9/21 Sun.

第144回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 144 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor

ピアノ
Piano

第1コンサートマスター
First Concertmaster

野平一郎
ICHIRO NODAIRA

モーツァルト
MOZART

[休憩]
[Intermission]

シューベルト
SCHUBERT

ケント・ナガノ *-p.7*
KENT NAGANO

ベネデット・ルポ *-p.9*
BENEDETTO LUPO

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

織られた時 IV～横浜モデルニテ
(委嘱新作／世界初演) [約8分] *-p.23*
Le temps tissé IV ~Yokohama modernité~ pour orchestre
(New Commissioned Work/ World Premiere)

ピアノ協奏曲 第24番 ハ短調 K.491 [約31分] *-p.24*
Piano Concerto No. 24 in C minor, K. 491
I. Allegro
II. Larghetto
III. Allegretto

交響曲 第8番 ハ長調 D944 〈グレート〉 [約48分] *-p.25*
Symphony No. 8 in C major, D 944 "The Great"
I. Andante – Allegro ma non troppo
II. Andante con moto
III. Scherzo : Allegro vivace
IV. Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール

9/25 Thu.

第651回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 651 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor

第1コンサートマスター
First Concertmaster

マーラー
MAHLER

ケント・ナガノ *-p.7*
KENT NAGANO

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

交響曲 第7番 ホ短調 〈夜の歌〉 [約77分] *-p.26*
Symphony No. 7 in E minor, "Lied der Nacht"
I. Langsam (Adagio) – Allegro risoluto, ma non troppo
II. Nachtmusik I. Allegro moderato
III. Scherzo. Schattenhaft
IV. Nachtmusik II. Andante amoroso
V. Rondo – Finale. Allegro ordinario

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社
※本公演では日本テレビの収録が行われます。

8/19
名曲

8/23
土曜マチネー

8/24
日曜マチネー

Maestro

指揮

ユライ・ヴァルチュハ
(首席客演指揮者)

JURA J VALČUHA, Principal Guest Conductor

鮮烈！
ヴァルチュハが振る
〈大地の歌〉〈英雄〉



©読響

ベルリン・ドイツ・オペラやヒューストン響などで活躍する鬼才ヴァルチュハがマーラー〈大地の歌〉で壮大な世界を描き、ベートーヴェンの傑作〈英雄〉では豊潤なサウンドを引き出す。

1976年、スロヴァキアのブラチスラヴァ生まれ。母国で作曲と指揮を学んだ後、サンクトペテルブルク音楽院とパリ国立高等音楽院で学び、ムーシンらに師事。フランス国立管デビューを契機に、欧米で活躍。2009～16年までRAI国立響の首席指揮者を務め、ウィーン、ベルリン、デュッセルドルフなどへのツアーでも成功を収めた。16～22年まではナポリ・サンカルロ劇場の音楽監督を務め、同劇場の水準を高めた手腕が高く評価された。17～23年までベルリン・コンツェルトハウス管の首席客演指揮者を、22年からはヒューストン響の音楽監督を務めている。読響とは22年に初共演し、24年から首席客演指揮者の任にある。

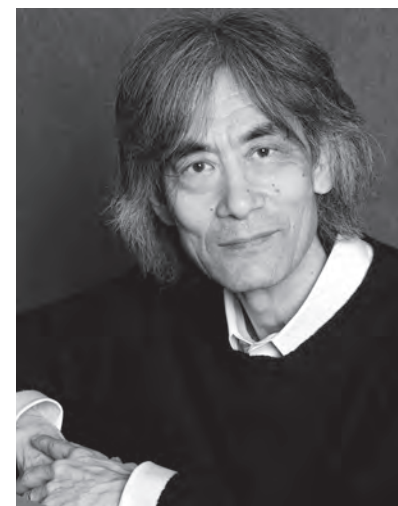
これまでにベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ドレスデン国立歌劇場管、ニューヨーク・フィル、ウィーン響、フィルハーモニア管、ミュンヘン・フィル、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、チェコ・フィルなどに客演し、古典から現代作品まで幅広いレパートリーで活躍している。バイエルン国立歌劇場で〈蝶々夫人〉、ベルリン・ドイツ・オペラで〈エレクトラ〉、ボローニャ歌劇場で〈サロメ〉、フェニーチェ劇場で〈ピーター・グライムズ〉などを指揮。近年は、ローマ歌劇場で〈イエヌーファ〉を、ベルリン・ドイツ・オペラで〈トリスタンとイゾルデ〉を指揮し、好評を博した。

指揮

ケント・ナガノ

KENT NAGANO, Conductor

巨匠ケント・ナガノ
読響初登場！



©Sergio Veranes Studio

ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭など世界の檜舞台で活躍し、数々の楽団や歌劇場で要職を歴任してきた巨匠ケント・ナガノが読響と初共演し、マーラー〈夜の歌〉やシューベルト〈グレート〉を指揮する。

1951年、アメリカのカリフォルニア州バークレー生まれ。サンフランシスコ州立大学で音楽と法学を修める。1983年、パリ・オペラ座でのメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉世界初演時に、作曲者自身の依頼により小澤征爾の助手を務めた。84年には副指揮者を務めていたボストン響で、急病で倒れた小澤に代わって振ったマーラーの交響曲第9番が好評を博し、活躍の場を広げていった。

1978～2009年までバークレー響音楽監督を、1992～99年まで英ハレ管音楽監督を、1988～98年までリヨン国立歌劇場音楽監督を、2001～06年までロサンゼルス・オペラ音楽監督および首席指揮者を、2000～06年までベルリン・ドイツ響芸術監督を、2006～13年までバイエルン国立歌劇場音楽総監督を、2006～20年までモントリオール響音楽監督などを歴任。2015～25年夏までハンプルク国立歌劇場音楽総監督を務めていた。日本では1986年に新日本フィルと共演しており、97年にはサイトウ・キネン・フェスティバル松本（現セイジ・オザワ松本フェスティバル）に出演。東京の常設オーケストラへの出演は約39年ぶりとなる。2008年旭日小綬章を、25年に旭日中綬章を受章。

9/21
横浜マチネー

9/25
定期

Maestro



©Stephanie Girard

メゾ・ソプラノ

サーシャ・クック

SASHA COOKE, Mezzo Soprano

グラミー賞を2度受賞、世界の主要歌劇場や楽団で活躍するディーヴァ。アメリカ・カリフォルニア州生まれ。ジュリアード音楽院などで研鑽^{けんさん}を積む。メトロポリタン歌劇場、サンフランシスコ歌劇場、ヒューストン・グラント・オペラ、イングリッシュ・ナショナル・オペラ、リセウ大劇場、ベルギー王立モネ劇場などで〈オランダ〉表題役、〈タンホイザー〉ヴェーヌス、〈ドクター・アトミック〉キティなど幅広いレパートリーを歌う。ティルソン・トーマス、サロネン、ネルソンス、パッパーノ、アントニーニら名匠の指揮でニューヨーク・フィル、シカゴ響、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ウィーン響、ロサンゼルス・フィルなどと共演している。マーラー作品のソロも多く務め、高い評価を得ている。読響初登場。

2024年リチャード・タッカー賞を受賞するなど、ドラマティックかつ力強い歌声で確固たる地位を築くヘルデン・テノール。アメリカ・ジョージア州生まれ。ジョージア州やマンハッタン、ボストンで声楽を学ぶ。メトロポリタン歌劇場での〈パルジファル〉表題役などアメリカで数々の成功を収めた後に欧州で活躍。23年4月にはキリル・ベトレンコ指揮ベルリン・フィルの〈影のない女〉皇帝でバーデン=バーデン音楽祭に、同年8月には〈トリスタンとイゾルデ〉トリスタンでバイロイト音楽祭に出演。24年にはバイエルン国立歌劇場に〈パルジファル〉表題役でデビューし、ベルリン・ドイツ・オペラで〈神々の黄昏〉ジークフリートを歌った。25年5月にはウィーン国立歌劇場で〈タンホイザー〉表題役を歌い好評を博した。読響初登場。



©Dasha Buben

テノール

クレイ・ヒリー

CLAY HILLEY, Tenor



ピアノ

ベネデット・ルポ

BENEDETTO LUPO, Piano

みずみずしい音色で美へのあくなき追求を続けるイタリアの名匠。1963年イタリア・バーリ生まれ。1989年ヴァン・クライバーン国際コンクール第3位入賞を機に一躍注目を浴びる。スクロヴァチェフスキ、ケント・ナガノ、ユロフスキ、ブラッソン、山田和樹、ガードナーらの指揮で、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、ボストン響、シカゴ響、ベルリン・ドイツ響、ロサンゼルス・フィル、モントリオール響、シアトル響、ロンドン・フィル、フィラデルフィア管、ロッテルダム・フィル、トゥールーズ・キャピトル国立管などと共演。タングルウッド、エネスコ、チボリなどの音楽祭にも定期的に招かれている。幅広いレパートリーでリサイタルや室内楽でも活躍をするほか、国際コンクールの審査員なども務めている。読響初登場。

ワーグナー

楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉から前奏曲と愛の死

「私はもう歌劇を書かない」。リヒャルト・ワーグナー（1813～83）がそう宣言したのは、1851年のことだった。歌劇、すなわちオペラでは、もっぱら歌手の名人芸披露が目的になっている。だが目指すべきは、身ぶりと音楽と詩が一体となった「^{そうこう}総合芸術」ではないのか？

この方向性を、ワーグナーはライフワーク〈ニーベルングの指環〉の創作を念頭に打ち出すようになるのだが、上演に4夜かかるこの大作がそう簡単にでき上がるはずもない。ならば、まずは劇場に供しやすい作品をとということで、〈指環〉の作曲を中断して創作したのが〈トリスタンとイゾルデ〉であった。いつものように、台本も自身で書いた。でき上がったものはしかし、手軽な作品などではなかった。台本は哲学詩のようだし、音楽は、ソシレときたらドミソといった「調性」を危うく無化せんばかりの大胆さだ。

最初の「前奏曲」からして、それは感じられるだろう。静寂の彼方からチェロがそっと声を上げる。そこに木管楽器の吐息がもの憂げにかぶさる。この応答が幾度も音の高度を上げながらくり返されると、ついにオーケストラが感極まったようにあふれ出す——トリスタンとイゾルデのまなざしが交差したのである。

物語は、中世を通じて流布したトリスタン伝説にもとづき、ワーグナー自身が自由に創作した。アイルランドの姫イゾルデが、コーンウォールの王マルケのもとに嫁ぎにゆくところから話は始まる。この政略婚をマルケに提案したのは、王の甥にして家臣トリスタンだった。ところがトリスタンはイゾルデを、イゾルデはトリスタンを密かに愛していた。禁断の恋が露見し、暴走する。第3幕ではトリスタンが逝き、ついにイゾルデも逝く。幕切れでのイゾルデの絶唱が、いわゆる「愛の死」である。本日は歌詞なしで、前奏曲から続けて演奏される。

〈船木篤也 音楽評論〉

作曲：1857～58年（前奏曲）；1859年（愛の死）／初演：1860年、パリ（前奏曲のみ）；1863年、サンクトペテルブルク（前奏曲と愛の死）／演奏時間：約17分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、弦五部

マーラー
大地の歌

〈大地の歌〉は、グスタフ・マーラー（1860～1911）晩年の傑作で、6楽章からなる管弦楽と声楽のための音楽である。冒頭楽章から順に、テノールとアルト（ないしはバリトン）が交代で独唱を受けもつ。初版のヴォーカルスコアには「交響曲」とあるが、現在の国際マーラー協会による批判全集は、本作をたんに〈大地の歌〉としている。

いずれの楽章も、ハンス・ベートゲの編訳による詩集『中国の笛——中国の抒情詩による追作』（1907年刊）から採られた詩をテキストとする。マーラーがこの詩集をはじめ手にしたのは、一説によれば1908年の7月7日、48歳の誕生日であったという。一読これに強くひきつけられ、すぐに作曲を思いついた。

この本には、紀元前12世紀から19世紀末までに書かれた中国の詩が収められているが、それらはみなベートゲがドイツ語で「追作」したもの。つまり、すでにドイツ語に訳された中国詩集や、そのまた元本となった仏語訳などをもとに作りあげた詩集であった。マーラーはそこから8世紀の唐詩ばかりを選び、さらに部分を改変し、異なる詩を繋ぎ合わせるなどして、本作のためのテキストを作り上げた。

楽曲の題名にいう「大地」、すなわちドイツ語のErdeには、二重の含みがある。まずは、人間がいつかは命尽きて去るこの現世・俗世の意味。第1楽章の題名は、詩の内容からすれば、「大地の愁い〜」ではなく「**現世の愁いをうたう酒歌**」と訳すべきだろう。第2楽章「秋に寂しき人」で、人が何に倦んでいるかといえば、これも俗世である。第5楽章「春に酔う人」は、「生もまた 一場の夢なら」と、現世をなかば自暴自棄の調子で歌っている。

そしていまひとつの含みは、悠久の自然。「大地」の訳語は、こちらにこそふさわしい。「天穹はとこしえに蒼く 大地は／ゆく末も揺るぎない」（第1楽章）というときの「大地」だ。これが、限りある人間の「現世」と対置されるのである。

現世についてはしかし、本作で否定的に描かれるばかりではない。第3楽章「青春について」と第4楽章「美しさについて」は、どこか回顧的なまなざしを含みながら、この世の「おもしろきもの」について歌っている。これら二つの楽章が、全体に厭世的な本作の中間に位置することで、〈大地の歌〉は、シンメトリックな構成

を示していると言える。

音楽的には、5音音階の多用や、マンドリン（琵琶の代わり?）、銅鑼などの積極的な活用が目を引き、ここから東洋趣味を云々することもできよう。拍子が一定しない（第6楽章のフルート・ソロ）シーンなども、そうした「東洋風」に含めてもよいかもしれないが、これはまた、次代のモダニズム音楽につながってゆく要素とみることでもできそうだ。

終楽章「告別」は八長調の主和音（ド・ミ・ソ）にラを加えた、どこか宙に漂う感じの和音で終わっているが、これらの音は、ここに到達するまでの全曲にわたって、主題上の構成要素（音列）として、いろいろに用いられている。たとえば第1楽章開始部のヴァイオリンに現れる旋律は、ミ・ラ・ソ・ミ・ラ・ソ・ミ・ドである。音楽哲学者テオドール・W・アドルノなどは、ここにシェーンベルク（1874～1951）の12音技法にとつての「最も近い時期の最も説得力あるモデル」を見出している。中国の8世紀が、西洋の20世紀のとば口に立っている格好だ。

1911年5月18日、死がマーラーを襲う。享年50。交響曲第1番から第8番までを、すべて自身のタクトで初演してきたマーラーだったが、〈大地の歌〉をオーケストラで耳にすることは、ついになかった。初演は作曲家の死の半年後、1911年11月20日に、ミュンヘンにてブルーノ・ワルター指揮で行われた。

〈船木篤也 音楽評論〉

作曲：1907年（最初のスケッチ）；1908～09年／初演：1911年11月20日、ミュンヘン／演奏時間：約63分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、銅鑼）、ハープ2、チェレスタ、マンドリン、弦五部、独唱（メゾ・ソプラノ、テノール）

《歌詞対訳》 Das Lied von der Erde / 大地の歌

訳：船木篤也

1. Das Trinklied vom Jammer der Erde

Schon winkt der Wein im gold'nen
Pokale.
Doch trinkt noch nicht,
erst sing' ich euch ein Lied!
Das Lied vom Kummer soll auflachend
in die Seele euch klingen.
Wenn der Kummer naht,
liegen wüst die Gärten der Seele,
Welkt hin und stirbt die Freude,
der Gesang.
Dunkel ist das Leben, ist der Tod.

Herr dieses Hauses!
Dein Keller birgt
die Fülle des goldenen Weins!
Hier, diese Laute nenn' ich mein!
Die Laute schlagen und die Gläser leeren,
Das sind die Dinge, die zusammenpassen.
Ein voller Becher Weins zur rechten Zeit
Ist mehr wert, als alle Reiche dieser Erde!
Dunkel ist das Leben, ist der Tod.

Das Firmament blaut ewig, und die Erde
Wird lange fest steh'n
und aufblüh'n im Lenz.
Du aber, Mensch, wie lange lebst denn du?
Nicht hundert Jahre darfst du dich
ergötzen
An all dem morschen Tande dieser Erde!

Seht dort hinab!
Im Mondschein auf den Gräbern
Hockt eine wild-gespensische Gestalt.
Ein Aff' ist's!
Hört ihr, wie sein Heulen Hinausgellt
in den süßen Duft des Lebens!

1. 現世の愁いをうたう酒歌
(李白による) テノール独唱

酒は黄金の盃にあり 今や飲めよと招いて
いる
だが しばし待たれよ
まずは我より吟じて差し上げよう!
この愁悶の歌が 高らかな囁いとなって
君らの心に響かんことを
愁いが忍び寄れば
心の庭は荒ぶ
萎れ そして絶え入る 飲びも
歌も
生は暗い 死もまた暗い

この家の主よ!
君が蔵には
かくも数多のうま酒!
ここにあるは 我が琴!
琴をつまびき 盃をあける
これら二つ事は 相似つかわしい
時をすぐり あおる一杯
これに勝るものか 地上の国々を併せたとして!
生は暗い 死もまた暗い

天穹は とこしえに蒼く 大地は
ゆく末も揺るぎない
そして花を咲かす 春ともなれば
しかるに人間よ お前の生は いかほどか?
百年と持たぬではないか

朽ちるばかりの瓦落多に 現を抜かしながら!

眼下を見よ!
月に照らされた墓場に
うずくまる物の怪の影ひとつ
あれは猿!
聞くがよい 生の香気に高鳴る
その号びを!

Jetzt nehmt den Wein!
Jetzt ist es Zeit, Genossen!
Leert eure gold'nen Becher zu Grund!
Dunkel ist das Leben, ist der Tod!

2. Der Einsame im Herbst

Herbstnebel wallen bläulich überm See,
Vom Reif bezogen stehen alle Gräser;
Man meint, ein Künstler habe Staub von Jade
Über die feinen Blüten ausgestreut.

Der süße Duft der Blumen ist verflogen;
Ein kalter Wind beugt ihre Stengel nieder.
Bald werden die verwelkten, gold'nen Blätter
Der Lotosblüten auf dem Wasser zieh'n.

Mein Herz ist müde. Meine kleine Lampe
Erlosch mit Knistern,
es gemahnt mich an den Schlaf.
Ich komm' zu dir, traute Ruhestätte!
Ja, gib mir Ruh! Ich hab Erquickung not!

Ich weine viel in meinen Einsamkeiten.
Der Herbst in meinem Herzen
währt zu lange.
Sonne der Liebe,
willst du nie mehr scheinen,
Um meine bittern Tränen
mild aufzutrocknen?

3. Von der Jugend

Mitten in dem kleinen Teiche
Steht ein Pavillon aus grünem
Und aus weißem Porzellan.

Wie der Rücken eines Tigers
Wölbt die Brücke sich aus Jade
Zu dem Pavillon hinüber.

さあ 酒を取られよ!
時こそ今だ 同士よ!
黄金の盃を 呑み干すのだ!
生は暗い 死もまた暗い

2. 秋に寂しき人

(銭起による) アルト独唱

湖面を青く渡りゆくは 秋の霧
霜に立つ 一面の草々
あたかも名工が 翡翠の微塵を
細やかな花に蒔いたかのよう

草花の甘き香りは いまや失せ
冷たき風に 茎は屈し折れる
金色に枯れたる蓮の花
やがてはこれも 水面を漂うことになろう

倦める我が心 小さき灯火も
終いの音とともに消え
床に就けと我を促す
さあ往こう いとしい安息の場に
憩いを与えたまえ 今こそ癒しを!

涙は止まるところを知らない 我は独り
あまりに長い
心の秋
愛の太陽よ
お前はもう輝っては呉れぬのか
苦渋の我が涙を
優しく乾かしては呉れぬのか?

3. 青春について

(李白による) テノール独唱

小さなお池の まん中に
緑と白の陶磁でできた
四阿ひとつ

虎の背に似た 弧を描き
翡翠の小橋が
その四阿に懸かる

In dem Häuschen sitzen Freunde,
Schön gekleidet, trinken, plaudern,
Manche schreiben Verse nieder.

Ihre seidnen Ärmel gleiten
Rückwärts, ihre seidnen Mützen
Hocken lustig tief im Nacken.

Auf des kleinen Teiches stiller
Wasserfläche zeigt sich alles
Wunderlich im Spiegelbilde.

Alles auf dem Kopfe stehend,
In dem Pavillon aus grünem
Und aus weißem Porzellan;

Wie ein Halbmond scheint die Brücke,
Umgekehrt der Bogen. Freunde,
Schön gekleidet, trinken, plaudern.

4. Von der Schönheit

Junge Mädchen pflücken Blumen,
Pflücken Lotosblumen an dem
Uferrande.

Zwischen Büschen und Blättern sitzen sie,
Sammeln Blüten in den Schoß und rufen
Sich einander Neckereien zu.

Gold'ne Sonne webt um die Gestalten,
Spiegelt sie im blanken Wasser wider.
Sonne spiegelt ihre schlanken Glieder,
Ihre süßen Augen wider,
Und der Zephir hebt
mit Schmeichelkosen das Gewebe
Ihrer Ärmel auf, führt den Zauber
Ihrer Wohlgerüche durch die Luft.

O sieh, was tummeln sich für schöne
Knaben
Dort an dem Uferrand auf mut'gen
Rossen,
Weithin glänzend wie die

綺羅を飾り 集う友たち
呑んでは 談じ
ある者は 詩をしたためる

絹の袖は 裏返り
絹の冠は うなじで
からくも引っ掛かる

小さな小さな その池の
静かな面に 物影うつる様おもしろく
どれもこれも あべこべなり

ものみな逆さの四阿は
緑と白の陶磁で
できている

半月橋の 投げる弧も
これまた逆さ 友たち
綺羅を飾り 呑んでは 談を交わす

4. 美しさについて (李白による) アルト独唱

少女たちは 花を摘む
池のほとりて 蓮を摘む

草むらに座り
摘んだ花を 膝に集めながら
たわむれ言を 投げ交わす

金の陽光が織りなす 少女らの影
輝く水面に 照りかえる
陽に映し出された その華奢なからだ
可憐なひとみ
そよ風の
愛撫を受けると
少女らの袂は ひるがえり その快い香が
奇跡となって あたりを舞う

見よ 少年らが颯爽と
彼方の岸を 駿馬で翔る
まばゆき様は 光線のように

Sonnenstrahlen;
Schon zwischen dem Geäst
der grünen Weiden
Trabt das jungfrische Volk einher!

Das Roß des einen wiehert fröhlich auf,
Und scheut, und saust dahin,
über Blumen, Gräser,
Wanken hin die Hufe,
Sie zerstampfen jäh
im Sturm die hingesunk'nen Blüten,
Hei! wie flattern im Taumel seine
Mähnen,
Dampfen heiß die Nüstern!

Gold'ne Sonne webt um die Gestalten,
Spiegelt sie im blanken Wasser wider.
Und die schönste von den Jungfrau'n
sendet
Lange Blicke ihm der Sehnsucht nach.
Ihre stolze Haltung ist nur Verstellung.
In dem Funkeln ihrer großen Augen,
In dem Dunkel ihres heißen Blicks
Schwingt klagend noch
die Erregung ihres Herzens nach.

5. Der Trunkene im Frühling

Wenn nur ein Traum das Leben ist,
Warum denn Müh und Plag?
Ich trinke, bis ich nicht mehr kann,
Den ganzen lieben Tag!

Und wenn ich nicht mehr trinken kann,
Weil Kehl' und Seele voll,
So taumel' ich bis zu meiner Tür
Und schlafe wundervoll!

Was hör' ich beim Erwachen? Horch!
Ein Vogel singt im Baum.
Ich frag' ihn, ob schon Frühling sei,
Mir ist als wie im Traum.

柳の間を
かき分けて
あれよ駆けゆく その一団!

一頭がいなき 立ち止まる
怖気づいては駆け抜ける
花の上を 草の上を
揺らぐ蹄
花を踏みしだくこと
嵐のごとし
どうどう! 靡くたてがみ

荒い鼻息!

金の陽光が織りなす 少女らの影
輝く水面に 照りかえる
ひときわ綺麗な少女が一人

かの少年に 憧れの眼差しを注ぐ
平気の態は ただの見せかけ
大きな腫の 煌きには
熱き眼ざしの 奥底には
いまだ もの問いたげな胸の高鳴りが
くすぶり見える

5. 春に酔う人 (李白による) テノール独唱

人生もまた 一場の夢なら
艱苦に耐えて 何になろう?
さあ呑むぞ とことんまで
日がな一日 呑んでやる!

これより先は もう呑めぬ
喉も心も一杯なりと
そうなりや よろりと戸口へ戻り
あとはたんまり 寝るだけさ

目覚めに聞く あれは何? ほら!
樹の中で歌うは 一羽の鳥
もう春なのかと 鳥に問うてみる
なにやら すべては夢のよう

Der Vogel zwitschert: Ja!
Der Lenz ist da, sei kommen über Nacht!
Aus tiefstem Schauen lauscht' ich auf,
Der Vogel singt und lacht!

Ich fülle mir den Becher neu
Und leer' ihn bis zum Grund
Und singe, bis der Mond erglänzt
Am schwarzen Firmament!

Und wenn ich nicht mehr singen kann,
So schlaf' ich wieder ein.
Was geht mich denn der Frühling an!?
Laßt mich betrunken sein!

6. Der Abschied

Die Sonne scheidet hinter dem Gebirge.
In alle Täler steigt der Abend nieder
Mit seinen Schatten, die voll Kühlung
sind.

O sieh! Wie eine Silberbarke schwebt
Der Mond am blauen Himmelssee
herauf.

Ich spüre eines feinen Windes Weh'n
Hinter den dunklen Fichten!

Der Bach singt voller Wohllaut
durch das Dunkel.
Die Blumen blassen im Dämmerchein.

Die Erde atmet voll von Ruh' und Schlaf.
Alle Sehnsucht will nun träumen,
Die müden Menschen geh'n heimwärts,
um im Schlaf
Vergess'nes Glück und Jugend neu zu
lernen!

Die Vögel hocken still in ihren Zweigen.
Die Welt schläft ein!
Es wehet kühl im Schatten meiner
Fichten.

鳥はさえずる その通り!と
春だ 一夜にして春が来たのだ!
深く深く 観ずれば
聞こえてくるのは鳥の歌 そして笑う声

ふたたび盃を満たし
一滴のこさず 飲み干す
そして歌おう 輝く月が
漆黒の天穹を 照らすまで!

これより先は もう歌えぬとなれば
また寝りゃいいのさ
春が何だというのか?
酔うがままに させとくれ!

6. 告別

(孟浩然、および王維による) アルト独唱

陽は沈みゆく 山の彼方に
一帯の谷に 降りくる夕暮れ
その影の 冷やかなこと

あれを見よ! 銀の小舟に似た月が揺らめき
碧天の湖水を のぼる

かそけき風の予感あり
闇なす松の影に

小川のせせらぎは 心地よい歌となり
闇を伝う
花の色は失せゆく この薄暮のうちに

大地の息は いま安らぎと眠りに満ち
昼の憧れは みな夢を欲する
倦み疲れた者らは家路につき
眠りのなかで
とうに忘れた幸福と青春を ふたたび
習いそめる!

鳥たちは おとなしく梢に憩う
この世は いま 眠りにつく!
一陣の涼風が 我が松影をよぎる

Ich stehe hier und harre meines
Freundes.
Ich harre sein zum letzten Lebewohl.

Ich sehne mich, o Freund, an deiner Seite
Die Schönheit dieses Abends zu
genießen.
Wo bleibst du? Du läßt mich lang allein!

Ich wandle auf und nieder mit meiner
Laute
Auf Wegen, die vom weichen Grase
schwellen.
O Schönheit! O ewigen Liebens –
Lebenstrunk'ne Welt!

Er stieg vom Pferd und reichte ihm
den Trunk
Des Abschieds dar. Er fragte ihn, wohin
Er führe und auch warum es müßte sein.

Er sprach, seine Stimme war umflort:
Du, mein Freund,
Mir war auf dieser Welt das Glück nicht
hold!

Wohin ich geh'?
Ich geh', ich wandre in die Berge.
Ich suche Ruhe für mein einsam Herz!
Ich wandle nach der Heimat, meiner
Stätte!
Ich werde niemals in die Ferne schweifen.
Still ist mein Herz und harret seiner
Stunde!

Die liebe Erde allüberall
Blüht auf im Lenz und grünt
Aufs neu! Allüberall und ewig
Blauen licht die Fernen!
Ewig... ewig...

我ここに立ち 友を待つ
我は待つ 最後の別れを告げるべく

焦がれるこの想い 友よ 君の傍らで
この夕刻の美を 味わいたい

どこにいるのだ? いつまで独りにさせてお
くのか!

逍遙する我 上りつ下りつ 我が琴を抱き
柔らかな草のふくよかに盛り上がる径をゆく
おお なんとという美! おお 止むことなき
愛といのちに 酔えるこの世!

男は馬を降り 友に
その一杯を
別れのしるしに渡した 一方が訊いた
どこに行くのかと また何ゆえ 行かねば
ならぬのかと
男は言った 哀しみに曇るその声で
友よ
我はついぞ この世の幸に恵まれなかった
のだ!

我が行く先は…
我は行く 山の中へ彷徨いゆく
孤独なこの心の 安らぎを探し求めて
辿りつくのは生まれた所 我が憩いの地

決して それより他所へ逸れることはない
静かなる我が心 おのれの最期を
待ちうける

だがこの大地は いずこも
春ともなれば花を咲かせ 新たな緑に
覆われる! 限りなく そして永久に
遥かな彼方は 蒼く輝く!
永久に… 永久に…

8/23

土曜マチネー

8/24

日曜マチネー

Program Notes

R. シュトラウス メタモルフォーゼン

第二次世界大戦末期、連合国軍によるドイツへの攻撃は次第に激しさを増していく。リヒャルト・シュトラウス(1864~1949)の歌劇〈ばらの騎士〉や〈サロメ〉、〈エレクトラ〉など数々のオペラの初演地であるドレスデンは廃墟となり、故郷ミュンヘンの宮廷歌劇場(現在のバイエルン国立歌劇場)も、1943年の爆撃で閉鎖を余儀なくされた。言葉にならない絶望と悲しみ、ドイツ文化の破滅と変容(メタモルフォーゼン)は、80歳を迎えたシュトラウスを創作へと向かわせた。1945年に完成したこの曲を作曲家は当初、自身の死後、発表するつもりでいたが、しばらくして思い直し、スイスの指揮者パウル・ザッハーに託した。初演は翌年、彼の指揮とチューリヒ・コレギウム・ムジクムによって行われ、作品は彼らに献呈された。

「23の独奏弦楽器のための習作」と副題が付いたこの曲は、ヴァイオリン10、ヴィオラ5、チェロ5、コントラバス3の23本の弦楽器による編成だが、いわゆる弦楽合奏ではなく、すべてのパートは独立して動き、スコアは最大23段で書かれている。今回、後半で演奏されるベートーヴェンの〈英雄交響曲〉の第2楽章「葬送行進曲」の冒頭主題から導き出された素材をもとに綿密に構成され、そこには自作の交響詩やワーグナーの楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉(ミュンヘン宮廷歌劇場で初演された)の動機も盛り込まれている。

楽曲(アダージョ・マ・ノン・トロップ)は、チェロの重々しい導入主題で始まる。続いて葬送主題と関連する、ヴィオラによる同音連打と付点のリズムの主要主題、さらにヴィオラとチェロによる新しい主題が示される。主要主題を中心に、大きな起伏を描きながら自由に展開され、抑制された、気高く濃密な音楽が広がる。最後は、スコアに「イン・メモリアム」と記されたところで葬送主題がそのままのかたちでコントラバスとチェロ3本にひっそりと現れたあと、静かに結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1944~45年／初演：1946年1月25日、チューリヒ／演奏時間：約26分
楽器編成／ヴァイオリン10、ヴィオラ5、チェロ5、コントラバス3

ベートーヴェン

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55〈英雄〉

1802年5月から半年間、ウィーン郊外のハイリゲンシュタットに滞在したルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)は、その地で遺書をしたためた。そこには身体的、精神的苦悩も書かれていたが、それは死へ向かう言葉ではなく、苦難を克服した者の力強い決意でもあった。

ウィーンに戻ってきたベートーヴェンは、書き溜めたスケッチをもとに創作に没頭する。ピアノ協奏曲第3番、ヴァイオリン・ソナタ第9番〈クロイツェル〉、ピアノ・ソナタ〈ヴァルトシュタイン〉など、傑作が次々と生み出された。これらに続く交響曲第3番は、全体の構成も音楽的発想も従来の交響曲にはない革新的な内容をもつ。作品規模は大きくなり、長調の交響曲としては異例の短調の緩徐楽章が置かれ、終楽章は変奏曲となった。

フランス革命の精神でもある共和主義を信奉していたベートーヴェンは、1歳年長のナポレオンを人間の自由と解放の象徴とみなし、この交響曲を捧げようとした。しかしナポレオンが皇帝に即位したことを聞くと激怒し、表紙を破って楽譜を叩きつけた。その後、〈英雄交響曲〉と題名が改められ、「ひとりの偉大な人物の思い出を記念して」と書き添えられた。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ ソナタ形式。勇壮な和音で開始され、朗々と歌われる第1主題と穏やかな第2主題が展開する。再現部の後に提示部に匹敵するほどの長大な終結部(第2展開部の性格ももつ)が置かれる。

第2楽章 葬送行進曲 アダージョ・アッサイ R.シュトラウスが〈メタモルフォーゼン〉で引用した葬送主題が弦楽器で示される。木管楽器が活躍する中間部はハ長調に転じ、ハ短調の主部と対比的な効果を生み出す。

第3楽章 スケルツォ アレグロ・ヴィヴァーチェ 軽やかな主部に対して、中間部のホルン三重奏は、この交響曲の聴きどころのひとつである。

第4楽章 フィナーレ アレグロ・モルト バレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉(1801)の終曲に基づく、明るく力強い変奏曲となる。 〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1803~04年／初演：1805年4月7日、ウィーン／演奏時間：約47分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦五部

8/23

土曜マチネー

8/24

日曜マチネー

Program Notes

野平一郎

織られた時Ⅳ～横浜モデルニテ（委嘱新作／世界初演）

2025年3～6月に作曲。作曲にあたっては、指揮者のケント・ナガノ氏から「何か横浜を象徴するような」作品にしてほしいとの注文があった。またコンサート^のの開幕曲とのことで、前奏曲的な性格をも与えるようにした。

あらためて日本における横浜という都市を考える時、ここから生み出されてきたもの、もたらされてきたものが大変な量と質を持っていることに驚かされる。横浜市観光協会のサイトによれば、ホテル・パン・競馬・牛乳・ビール・新聞・ガス灯・鉄道・マッチ・電話・自転車などなど、日本で初めて展開された事業が目白押しであり、これらすべてが当然ながらベリーの浦賀来航から始まっていることに思いを馳せた。この作品では、始まってすぐホルンに船舶の汽笛が模倣され、曲中何回か現れる。また鉄道が品川～横浜間の前年に既に横浜～神奈川間の試運転が始められていたというのも象徴的で、鉄道信号音（警告音）も一部ここに取り入れられている。

作品は、ある種のファンファーレから導入され、こうした現実的な「音」を一部に使いながら、1860年代から現在へと至るさまざまな横浜が持つ「モデルニテ（近代性・現代性）」を象徴するパッセージが入り組み、時間の織物のような形を呈している。ファンファーレは3本のトランペットで始まるが、それは西洋の教会の鐘の音であると同時に、そこに絡んでくる打楽器の音と共に、こうした西洋の文物をもたらしきっかけとなったアメリカ艦隊の軍隊のイメージにもつながっている。

どのパッセージにもよく出てくる反復音のリズムが、縮小したり拡大したり、また基本のリズムに衝突することで、それがエネルギーを作品に与え、曲が劇的な性格を含むものとなった。

野平一郎

*「織られた時」という作品は、1990年にパリのアンサンブル・アンテルコンタンポランの金管・打楽器アンサンブルのために書いたIをはじめとして、2000年代になって尺八・三味線・箏のためのⅡ、吹奏楽のためのⅢといったさまざまに異なった編成で試みられている。いずれも時間が織物のように縫い合わされていくという発想のもとに、複数の音楽的時間が複層したり断絶したり協調したりしながら、1つの大きな流れを作っていく。

作曲：2025年／初演：2025年9月21日、横浜／演奏時間：約8分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、打楽器（大太鼓、小太鼓、トムトム、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、ウッドブロック、コンガ）、ハープ、弦五部

■野平一郎 作曲家、ピアニスト、指揮者、教育者として国際的に活躍する音楽家。作品は200曲を超え、その中にはオペラ〈マドルガーダ〉（キール歌劇場／ケント・ナガノ指揮世界初演）などがある。日本芸術院会員。東京文化会館音楽監督、東京音楽大学学長。

モーツァルト

ピアノ協奏曲 第24番 八短調 K.491

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）の作品のほとんどは長調で書かれている。短調の曲はごくわずか。全作品中どれくらいの割合で短調の曲があるのか、厳密にカウントするのは意外と難儀なのだが、ざっくりとした概算として作品一覧を表計算ソフトに貼り付けて算出すると、およそ8パーセントの作品が短調で書かれている。ピアノ協奏曲に限れば全27曲中、この第24番八短調と第20番二短調の2曲が短調作品。やはり短調の曲は7パーセント台に留まる。そして、数は少ないものの、なぜかこれら短調作品には屈指の傑作がそろそろ。渦巻く暗い情熱と緊迫感あふれるドラマティックな性格は、長調作品における晴れやかで祝祭的な雰囲気とは対照的で、モーツァルトの秘められたもうひとつの顔を見せてくれる。

第1楽章 アレグロ 地を這うようなファゴットと弦楽器により異様なムードで開始される。主題はどこか不安定で、フレーズの終わりの跳躍が特徴的。クラリネットもオーボエも含んだ当時としては大編成のオーケストラが分厚い響きを作り出し、独奏ピアノと力強い対話をくりひろげる。終結部の前にカデンツァが挿入されるが、作曲者自身の作は残っていない。

第2楽章 ラルゲット 前楽章の張りつめた緊張から解放され、穏やかで淡々とした主題が奏でられ、寂寞とした^{せきばく}気配を漂わせる。独奏ピアノに加えて、木管楽器群のアンサンブルも聴きどころ。

第3楽章 アレグレット 忍び寄るような主題で開始され、静かな緊張感^{かも}を醸し出す。主題が次々と変奏されてさまざまな表情を描き出す。ひなびたディヴェルティメント風や勇ましい行進曲風等の変奏を経て、最後はいくぶん空虚な表情を見せながら唐突に曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1786年／初演：1786年4月7日、ウィーン／演奏時間：約31分

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

シューベルト

交響曲 第8番 八長調 D944 〈グレイト〉

「私は自分が世界でもっとも不幸でみじめな人間のように感じます。想像してみてください、健康が二度と回復せず、絶望から事態がますます悪くなっていく人間を。輝かしい希望が打ち砕かれ、愛や友情の幸福が痛みしかもたらさず、美への感動すら失われつつある人間を」

大作曲家が残した手紙でこれほど痛ましいものがほかにあるだろうか。1824年3月31日、フランツ・シューベルト（1797～1828）は友人に宛てて、自身の境遇を嘆いている。しかし、同じ手紙の後半では力強い展望が述べられる。

「歌曲はあまり書いていませんが、代わりに器楽曲に取り組んでいます。二つの弦楽四重奏曲と、八重奏曲^{ひら}を作曲しました。さらにもうひとつ四重奏を書くつもりです。つまり、こうやって大交響曲への道を切り拓こうとしているのです」

この翌年、25年から26年にかけて交響曲〈グレイト〉が作曲された。旧作の交響曲第6番八長調と区別するために「大きい八長調」という意味で「グレイト」と呼ばれる。作品はウィーン楽友協会に提出されたものの、なんらかの理由で初演は実現しなかった。作曲者の死後、1839年にシューマンが楽譜を発見し、メンデルスゾーンが初演を指揮して、ようやく日の目を見ることになった。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ・マ・ノン・トロppo ホルンにより悠然と序奏が開始される。弦楽器が弾むような主題を奏でて主部に入る。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 歩くような弦楽器の前奏に、オーボエの寂しげな主題が続く。穏やかに始まるが、中盤のクライマックスは壮絶。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 上機嫌のスケルツォと揺れ動くトリオ。

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 長大なフィナーレ。躍動する音楽はいつまでも続くかのよう。ベートーヴェン「歓喜の歌」へのオマージュが挟まれる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1825～26年／初演：1839年3月21日、ライプツィヒ／演奏時間：約48分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

マーラー

交響曲 第7番 木短調 〈夜の歌〉

グスタフ・マーラー（1860～1911）の交響曲第7番は“メタメタ”の音楽である。といっても、この言葉は「ひどい失敗作」という意味ではなく（失敗作の側面もあるが、問題は作曲家がそれを意図したかどうかにある。後述）、「自己言及的であること」を表している。

自己言及とは文字通り、自分自身について述べること。もっとも有名なのは「嘘つきパラドクス」だろう。「私は嘘をついている」。さて「私」は嘘をついているのかいないのか。この自己言及文は背理を導くが、交響曲第7番にはなんらパラドクスはない。ないけれど、自身の有りようのおかしさを^{あぶ}炙り出す仕組みにはなっている。

マーラーは1904年から05年にかけて、第6番を書き上げるのと並行して第7番の作曲に取り組んだ。場所はおもにマイアーニックの作曲小屋。だから、第6番と第7番は双子の交響曲と言ってよい。こうした交響曲の双子化は珍しいことではない。ベートーヴェンは1812年、第7番と第8番とを同時に書き進めた。その結果、2曲は舞曲集のような体裁を共有することとなる。マーラーの第6番と第7番も、一般的でない楽器を多用する点で共通している。また、明るい響きの和音と暗い響きのそれとを同じ構成のまま隣り合わせにする（長三和音と短三和音を並置する）手法をいずれも採用する。

だが、マーラーの“双子”の目指すところは、ベートーヴェンの場合とは異なっている。異なっていると言うより、第6番の課題を第7番でいっそう深くえぐろうとしたと表現したほうがよいかもしれない。第6番で作曲家は、交響曲の代表的な創作原理であるソナタ形式の「半殺し」に取り組んだ。ここで言う「半殺し」とは、作品としてかるうじてソナタ形式の姿をとりながら、実はソナタ形式の限界を浮き彫りにする試みを指す。その点で自己言及（メタ）的である。

一方、第7番では「もはやベートーヴェン以来の『交響曲物語』はこんなにも白々しいのだ」というメッセージを示す。ソナタ形式を超えて交響曲そのものの解体に乗り出しているわけだ。その意味で第7番は、自己言及（第6番）をその内に含む自己言及言及（メタメタ）的な交響曲である。

曲は5楽章制をとる。マーラーはそのうち第2楽章と第4楽章を「夜の音楽」と

名付けた。それにより今日、交響曲全体を「夜の音楽（歌）」と称することがある（が、それはあまりふさわしくない）。

第1楽章 序奏付きのソナタ楽章。序奏の主題をテナー・ホルン（別名バリトン）が吹く。これがくせもの。プラスバンドに由来する楽器で、管弦楽の中にいると響きの点でも存在そのものの点でも、いかにも据わりが悪い。安定感と違和感、陽気さと陰気さをマーブル模様にしてソナタ形式に閉じ込める。

第2楽章「夜の音楽」 角笛の呼応に始まり行進曲風の楽想にいたる。和音の長短並置やカウベルの使用など、第6番の影が濃い。楽章中、弦楽器が^{たた}コル・レーニョ（弓の木部で弦を叩く奏法）で歌曲〈死んだ鼓手〉のリズムを模倣する。されこうべのぶつかり合いもかくや。

第3楽章 スケルツォ。要領を得ない、気味の悪いワルツともとれる。音量や音勢に極端な表現が頻出する。いわゆるバルトーク・ピッツィカート（引っ張った弦を放して指板に当てる奏法）を含め、異形の楽章。

第4楽章「夜の音楽」 伝統的な「セレナード（夜曲）」を追慕する。マンドリンやギターを編成に入れること、メロディーやハーモニーを不定形にすることで、不安感を通底させる。

第5楽章 ロンド楽章。この楽章により交響曲の解体が実現する。通俗的などんちゃん騒ぎはいかにも白々しい。この白々しさこそ「失敗」なのだが、それは作曲家の失敗ではなく、20世紀初頭の交響曲自体の「失敗」である（とテオドール・アドルノは言う）。「苦難を通して星へ（ペル・アスベラ・アド・アストラ）」という（運命交響曲に代表される）標語はもはや力を持たない。それを白日の下に晒すことでマーラーは、自己言及言及（メタメタ）的交響曲を現実のものとした。

（澤谷夏樹 音楽評論家）

作曲：1904～05年／初演：1908年9月19日、ブラハ／演奏時間：約77分

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、テナー・ホルン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル付大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、ルーテ、カウベル、銅鑼、鐘）、ハープ2、ジュ・ドゥ・タンブル、ギター、マンドリン、弦五部